

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 26 日現在

機関番号：32501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370224

研究課題名(和文) 修辞表現の分析に基づく和歌史研究の構築

研究課題名(英文) Construction of research methods of Waka (traditional Japanese poetry) history, based on the analysis of rhetorical expressions

研究代表者

白井 伊津子 (SHIRAI, Itsuko)

淑徳大学・総合福祉学部・教授

研究者番号：40323224

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：日本古代和歌における中国詩文の影響を、修辞表現、とりわけ対句や「物」と「物」とを取り合わせる対偶語という観点から分析し、古代和歌史研究の新たな面を拓くことを目指した。結果、形式的な側面と意味的な側面の区分けが曖昧なままに対句論が展開されているという、研究史上の課題とともに、『萬葉集』においては、「物」を歌に詠み込む際の方法意識が詩文の影響を受けて次第に醸成されていることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：The aim of this research is to develop new methods of studying ancient Waka (和歌) history. It is based on the analysis of influences of Chinese verse and prose on ancient Japanese poetry, from the viewpoint of rhetorical expressions such as couplets and parallel antithetical words connecting one thing with another in particular. The research has resulted in two findings. One, an issue relating to research history, is that it has been made clear that theories on couplets were developed with the distinction between meaning and form left remaining unclear. The other is that it has been clarified that methodological awareness of how to chant things in poetry was gradually nurtured in Manyoshu (萬葉集) under the influences of Chinese verse and prose.

研究分野：日本文学

キーワード：修辞表現 萬葉集 和歌 対句 対偶語

### 1. 研究開始当初の背景

これまでの和歌史研究においても、修辞表現の変遷は重要な意味をもった。喋々するまでもなく、『萬葉集』の枕詞、『古今和歌集』の序詞、懸詞・縁語の技法といった特徴的な修辞が、各時代、あるいは代表的な歌集における、歌風の変遷をたどる上での指標とされている。その点で、近年編まれた、和歌文学会編『和歌文学の世界 第十集 論集 和歌とレトリック』(笠間書院、1986)などは、修辞に特化して和歌の特集を組む、意欲的な試みと捉えられる。

たしかに個々の修辞技法は、歌の展開とともに間断なく継承されているのであって、だからこそ、そうした修辞表現の展開の相、およびそれぞれの修辞間の交渉を解明することで、各時代の和歌史の間隙を埋め、和歌史研究を確固たるものにすることができるといえよう。

件の修辞研究において、申請者(当該研究代表者)は、一貫して、修辞の形式とその意味機能という観点から、表現の分析を行っている。たとえば、枕詞、序詞、懸詞などについて、修辞の形式は変わらずとも、歌人あるいは時代の要請に従って本来の意味機能が変わり、そのことが歌の質の変化に密接に関わっていくという次第を浮き彫りにすべく努めてきた。すなわち、和歌史の研究において、修辞が一つの重要な観点として位置づけられるべきことを確認してきたともいえる。

しかし、和歌における修辞について、その研究対象である修辞技法がいまだ十全に取り上げられているとはいえない憾みがある。対句、見立て、故事(古歌引用によるオーバーラップ効果など)といった修辞の変遷、いずれの修辞とも密接に関わる譬喩の表現方法の分析である。さらには中国の詩文における修辞表現の、わが国における受容に関する実際も、十分に解明されているとはいいがたい。そうした、課題の逐一になお向き合う必要があろう。

### 2. 研究の目的

修辞を基盤とする和歌史を構築する上で、もっとも研究が立ち遅れているのは、中国の詩文に用いられる修辞が、わが国の歌に与えた影響を丹念に考察することである。たとえば、対句表現、譬喩表現、古歌意識の問題、題詠などであり、なかでも対句の問題は、記紀歌謡の対句と『萬葉集』の長歌の対句との差異、さらにはそうした対への意識が短歌に与えた影響など、詩と歌、長歌と短歌という形式の異なりのみならず、対偶語の関係やその表現性など、複雑で微妙な問題に立ち入ることは免れない。ゆえに、詩文の修辞の形式と機能が、歌の修辞表現にいかにか大きく影響を与えたかを見極めることには相応の意義が認められるといえよう。

そこで、まずは大きく次の五つの観点から

の分析が不可欠となる。

- (1) 中国における対句論の分析と整理
- (2) わが国における対句論の分析と整理
- (3) 中国の詩文における対偶語の基礎資料作成

(4) わが国の漢詩文および歌における対偶語の基礎資料作成

- (5) 対句の形式的側面、対偶語の意味的側面からの古代和歌の表現分析

以上の分析をもとに、中国の文学理論や詩文の修辞表現がわが国の和歌の修辞に与えた影響を考察し、その核となる重要な部分を浮き彫りにしていく。

### 3. 研究の方法

中国の詩文に用いられる修辞が、わが国の歌に与えた影響を丹念に考察するために、最初に行うべきは、

- (1) 中国における対句論の分析と整理

(2) わが国における対句論の分析と整理のごとく、修辞論・文学理論として、対句に関する把握の実際を確認することである。中国の対句の研究書として、古田敬一氏の大著『中国文学における対句と対句論』があるが、さらに最新の研究成果を取り込みつつ、劉勰『文心雕龍』から陳騭『文則』に至るまでの詩論書に基づいて、対句論の展開を整理する。一方で、わが国においても、詩論書の『文鏡秘府論』から、近世の橋守部『長歌撰格』、小国重年『長歌言葉珠衣』など、長歌の構成を中心に対句に言及する歌論書までを網羅し、同様に諸説を整理し、修辞論としての展開を押さえる。

次に、必要な作業として、

- (3) 中国の詩文における対偶語の基礎資料作成

(4) わが国の漢詩文および歌における対偶語の基礎資料作成

がある。対句の問題は、対偶となる語(物)と語(物)の関係がきわめて重要となるため、詩文の例と、わが国の漢詩文および歌にみられる対偶の語の比較一覧を試みる。中国の文学作品からは、『毛詩』・『文選』・『玉台新詠』や北周のユ信、初唐の王勃・駱賓王の集など、日本の古代文学に大きな影響を及ぼした中国の総集・別集の詩文を中心に取りあげ、わが国の文学作品においては、『懷風藻』・『萬葉集』および『凌雲集』以降の勅撰三集、『古今和歌集』以降の三代集まで目配りしつつ進める。

(1) から(4) までの基礎的な分析を踏まえて、最後に、

- (5) 対句の形式的側面、対偶語の意味的側面からの古代和歌の表現分析

に取り組む。『萬葉集』と三代集の歌を、長歌、短歌といった形式や対偶語の観点などから分析し、その通時的な展開の相と、中国の文学理論や詩文の修辞表現がわが国の和歌の修辞に与えた影響を考察し、核となる重要な部分は何かを明らかにしていく。

#### 4. 研究成果

『萬葉集』の部立のみならず、部立中の下位項目まで含めて、歌が何がしかの部類に分けられている実際は、『萬葉集』における修辞意識の反映として、きわめて重要な意味をもつ。修辞と「物」にかかわって一覧すると、次のようである。

- 卷三 部立「譬喩歌」
- 卷七 部立「雑歌」項目「詠～(物)」  
「寄物発思」
- 部立「譬喩歌」項目「寄～(物)」
- 卷十 部立「春雑歌」項目「詠～(物)」  
「譬喩歌」
- 部立「春相聞」項目「寄～(物)」
- 部立「夏雑歌」項目「詠～(物)」  
「譬喩歌」
- 部立「夏相聞」項目「寄～(物)」
- 部立「秋雑歌」項目「詠～(物)」
- 部立「秋相聞」項目「寄～(物)」  
「譬喩歌」
- 部立「冬雑歌」項目「詠～(物)」
- 部立「冬相聞」項目「寄～(物)」
- 卷十一部立「寄物陳思」
- 部立「譬喩」左注「寄～(物)喩思」
- 卷十二部立「寄物陳思」
- 卷十三部立「譬喩歌」
- 卷十四部立「譬喩歌」

しかも、こうした部立や項目などとして表面化されてはいないけれども、巻八に収められる歌には、巻十に収められる歌と質的に等しい面がある。それは、四季に分けた「雑歌」の部立の歌が、中国の「詠物詩」の影響を受けているという点である。さらにその傾向は、四季に分けた「相聞」の部立の歌において、「寄～(物)」と示される場合の例も同様といえる。

中国の詠物詩の影響を受けて、「物」をいかに歌に詠み込むのかという反省のもと、「相聞」的な内容の表現方法の一つとして、「寄物陳思」(巻十一・巻十二)という歌の表現形式が意識され、さらに天平期に、「詠物」的な歌作の志向「詠～(物)」(巻八・巻十)の延長に「寄～(物)」(巻十に加え、巻八も同様)というあり方が位置づけられるに至ったと考えられる。

このことは、「物」を軸とする歌の配列(巻七・巻十・巻十一・巻十二)が、中国の類書における「物」による類聚のあり方に示唆を受けたという、すでに指摘されていることとも軌を一にする。〔雑誌論文〕

以上を踏まえ、あらためて部立の「譬喩歌(譬喩)」「寄物陳思」に目を向ける必要がある。いずれも、譬喩表現を用いた歌を、『萬葉集』において定位する用語として機能していると捉えられるからである。

すなわち、『萬葉集』の「譬喩歌(譬喩)」の部立、項目に分けられている歌は、一首全体に及ぶか及ばないかの差異はあるものの、いわゆる景物の事象を媒介とした寓喩の歌と判断される。当然ながら、詠み込まれる

「物」は主要な譬喩媒体であって、人事的な事象を叙するにあたって、主語的な位置に置かれる傾向にある。

一方、「寄物陳思」には、景物の事象から人事(本旨)への転換に際し、両者の述語的な一致によって、景物の事象が人事を連用修飾的に規定する序歌が多く収められている。そうした形式的な相違に視点が据えられたことの反映として、「譬喩歌」「寄物陳思」を捉えることができる。

用語それ自体も、和習的な「寄物陳思」に対して、「譬喩」は、中国六朝における文学理論の展開と無縁ではない。「物」を「譬喩」(寓喩)の媒体として分析的に解説する王逸の「楚辞章句」、その分析を、経書に端を発する「比興」の解釈の中に位置づけたのが『文心雕龍』、そうした展開が、『萬葉集』の「譬喩歌」の方法に大きな影響を及ぼしている。〔雑誌論文〕

「物」をいかに詠むかということが、方法としての形式性をもつに至った時、「譬喩歌」「寄物陳思」中の序歌として、ひとつの修辞的な成立をみることになったと考えられるのである。〔方法と主題に即して 雑誌論文〕

以上が、主要な成果である。前掲の(1)～(4)については基礎的な分析・整理の作業として順次行った。その過程および(5)の考察を深める中で、語と語の関係のあり方が、対句を構成する長歌形式のみならず、整然とした対句形式をもたない短歌形式の歌においても重要であることを確認した。すなわち、これまでの『萬葉集』対句の研究は、長歌を主たる対象として、歌謡に見られる繰り返し表現を踏襲したものなのか、あらたに詩の対句表現を受容したものなのかという相違点に重さが置かれてきた。たしかに、詩においては、一首の構成と切り離すことのできない対句はきわめて重要な表現であって、その影響をうけて長歌の表現や構成が工夫されていくことも十分認められる。

しかし、そもそも対句表現が、文学作品において何を可能とする修辞表現であるのかを省みたとき、そのありようは、必ずしも構成をになうという側面に限定されるものではない。また、詩と歌とでは、その表現効果において違いが生じても不思議はない。

さらに、対句という定義に即しても、多様な視点がある。たとえば語のレベル、句のレベルがあり、その語においても、類義、対義といった広がりをもつ。なかでも、対偶語は漢語の構成要素としても顕在しており、概念的に対比・類比する意識が顕わであると考えられる。

そこで、詩文の対偶語を基盤に据えて、長歌のみならず短歌についても同様に、対偶語のあり方を概観することは、「対」の表現性や「対」への意識を探る上できわめて有効である。よって、井手至著『遊文録 萬葉篇二』(第六章 対偶語の用法)を参考に、『萬葉

集』における対偶語の一覧を作成した。〔その他〕

なお、詩作における対句論と実作との関係については、空海編『文鏡秘府論』と空海の詩文の表現を対照的に分析すべきとの知見を得た。すなわち、空海の詩にあつては、対句の使用が、近体詩の作法の枠を超えて行われており、単に対句に意を注いだということには留まらない面があるだろう。奈良時代から平安初期にかけて、詩文の対句表現のあり方を解明することの有効性を認識できたことも、本研究の成果といえる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

白井伊津子、『萬葉集』の譬喩歌の方法(「萬葉」223号、pp.15-32)査読有、2017年

白井伊津子、〔書評〕平舘英子著『萬葉悲別歌の意匠』(「国文目白」55号、pp.42-44)査読無、2016年

白井伊津子、『萬葉集』における「詠物」と「寄物」(「美夫君志」87号、pp.15-31)査読有、2013年

〔その他〕(計1件)

白井伊津子、『萬葉集』対偶語一覧、私家版、pp.50、2017年

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

白井 伊津子 (SHIRAI, Itsuko)

淑徳大学・総合福祉学部・教授

研究者番号：40323224

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし